



候晴抄 卷終



特別
14
1919
737



1919
737

茶話

去歲手錄



養函漫筆の内

茶修

皇化二千六百五年 聖典
奉りしるありぬ



一 油をすつておぼ多くつた

二 茶をすつておぼ多くつた

三 釜つたてば茶の湯はなほを

四 湯のうら具のぬきはかろき

一 釜の湯とは生湯を沸し若く

つむはつと事といふ

一 湯の入りと出の事

我身なみの師匠の事

一 河を舟に乗りあつてふた

取手はかゝる事
お七九

一 水と湯と茶巾と釜を以て若楊枝

柄杓と心あはる事

一 煮る心を以て心は居る事

以上列休る
好

一 家積千金無主人喫茶大板

詎か真真茶真あが清味

貴は元清く自食 秋成

一河閑休れくまの木のこえを煮て

心々秋のみとことすまのこ上

一河さふく好の産のなげかに すかしくと特

隣ふよまう

一河くく甘は庭ハ物とみみん

茶を煮て心すまをたこうを

一東坡云自茗似自人

一聴与橋中も自涼何停架

一研粉林香露来為煮秋

山茗自洗冰既仔細嘗

倪亨本

今年喫亦去年茶未算嘗

嘗今穿芳忘老又為來歲貯

一圓先喫小春茶

倪亨本

一陽嫩水輕花不散口甘

神爽味偏長 古

一香清且久味印之氣清且香

切之茶品高者少者少者性

也生之氣性不重者少者性

の香を失ふ 精考

一 茶壇 額上 無宿主 拂也

人間名利産

一 手や口で 茶をすすむ人は多しと云

心の茶の湯すすむ人の多しと云
利休

一 衡の客去 秋夜長 如煙裏

茶の香 陰壁 吟絶 秋将

おき 樹風 空夜未央 言前

の月影 沙没 轉少 燈之 柱

風狂 行風 鼻に 狂且 細也

地未和 弄筆 貴法 香波 攪

山中相時又逢，白雲揚埃
物必權盡，力未可升仙
金玉將如，天高時陸以漸
若徑若拾，事何忙獨坐
斯遠自飲，飲而終於自昇

玩遺芳忘却心中事
五更燈火看空臺 字鼎

心外無茶，茶外無心心

茶一法 黃茶翁

一濟勝之伴，嗟汝良黃何地
策奠，詩前酒後 亦作題茶籃

龍鳳團成呼社學圍碁按
城內先皇未知而朕風生
習之已少隨手起趙汝高

一茶、茶、中流、露芽、醒酒、客喚、詩
家、菁、羹、不同、羊、酪、誰、誇、瓊、液
竹笋、水、杯、分、翠、花、一、陣、扶、風、起

月、三、聲、壠、數、朝、安、澆、亦、胸、蒼
何、所、憶、竟、改、地、下、寄、生、涯一、六、至、七
字、符、元、續

一茶、茶、香、素、嫩、芽、蒸、詩、客
愛、惜、家、碾、形、白、玉、羅、織、紅
紗、鈿、燕、黃、蕊、色、梳、轉、趨
蒼、老、夜、後、邀、悟、吟、月、晨、前

命を朝露に洗ひ古今人の傳へ

狩知解後堂地誇口上 谷主惠斗堂

一 望もまはらむ尾のほくく 夢ささく

あふらにいらぬ おろ田けば庭

葉つかりて 宵の時をを替り茶

と煮火潤長の子葉(結後訓承集)

一 木の葉散つゝも冬もまの 踏次

にしやうお申の序あつゝく けめを

たまさかひひくくわうりの 雲は茶

に白み口切の春 炸開(口上)

一 秋拾綴と葉茶夏流るる

僧貫休

一 山が卒入る處消ぬ酒に花流

梳洗新茶

細勻花點澹林禽懶不鳴寂莫

子中屯內有煎茶歌

七言五言

· 或人間景山子言茶法字曰景山

· 君曰未也嘗少更其味也昔而

甘其黑也廉而清其宜也操而

用其庭也澹而幽其文也睦而禮

教會而不費能出而不吝者此

而已至其反之者吾所不知也

· 詩特只為飲茶多

一 酒偏善氣切如勇茶只清

心德似仁

ちよお

一 吾如美足多々特の世を切んと

めさま〜 吾を去る家也

昔は能く去る

一 寒熱の地獄に通ふ茶極約也

心無んば苦もさう

利休茶約
の極也

一 日高丈五睡心流軍将扣つ

敬園公口傳諫議送書信

白絹斜書三道印開緘

宛見諫議面首関月因

三百斤関道新年入山裏

蟄蟲驚動春風起、天子
須嘗陽羨茶、百年不敢先
開花、仁風暗結珠玑膏、先
春抽出黃金芽、摘鮮焙芳
旋封重裹、玉精至好且少奢、
必尊之、餘合王公、何事便到

山人家、柴門反閉無俗客、紗
帽籠頭自煎喫、瑞石室引
風吹、水汲白花、浮光潏
碗面、一碗喉吻潤、二碗破
悶、三碗搜枯腸、唯恐文字

五千卷，四破費，輕行，平生
亦平事，亦向毛紀散，亦破
肌骨清，六破通，仙室七
破喫，亦以也，唯免為腹習，
清介生蓬萊，山在何處，玉
川子乘此清風，飛降志。

山之群仙，司下土，地住清高
滿風雨，安得知百萬億
其生命，墮在顛，山屋受
辛苦，便從謀議，問蒼生，到
顛得蘇息否

靈同茶歌

一 聞君子議論如啜茗若森
去之後甘芳溢類聞小人
諛笑如嗜糖沙爽美之
後寒涇凝腹煎法
一 和敬清寂

一 知量者味其醇味吸香
杉風不意差

一 夫九茶の湯の道とて外に
嘉文に忠孝を名し家
業を怠り殊に用友の定

さきふこと勿れ春は夏夏
は青きあかしの時を彩は
寂しきまゝの夕の光を
曉いつゆふ茶の湯の反情を
一及のまゝのまゝの珍しき

まゝのまゝのまゝの石物とても異うた
るものも大ききものも其苦は
新しき先達も傳りたる
こと名物もかき無きものも形
も用ひす新しきものも形

うしきは捨つる命をばいぢき
を道次まじりやあふはふし
具ろも成がたもてはや
と子ゆひ侍る道もあふ
一飯ともあふらたをま

多味さるも志しき時は早瀬
の鮎みそ屋の鯉も味もあふ
かきそ羅のふ山跡の葛か
の釜の煮るを考はふこと勿れ

以上小坂遠物の書捨の文也
一深田正韶の喫茶秘録ニ云
茶は多や丸印右衛門は六示旦の儀
を習ひし不三十ばあつて初て茶を
出さんとせしが折から京にいと湯

池道徳を古老の茶人と稱すんば
まかふはさき、外々の者も等
ひて追々に批物を多し、正しき所を
草一なるけり、この古に道徳を批か
んとし、其父やつて、以てそのの
不了、尚、とて、海尋かす

石儀の氣に入らへかき大勢の
批物は用に主なる道儀一人の
了簡をゆか茶のしあは
極まればちがふ法を扱ふ
しといひし者下を尋にそお清
し其後彼の文道儀に批判

きこいしん扱と殊縁に能く致
せんといふ言はたりし者は
最初その父子のし簡をいひて
是れくんとあふ清ひんがま程
まはすの甲せん先づ掃除が
しきる陽から陽をせんめくこと

云はく、禮の儀に於て、
とほむとくせと、
人の竹、植木も、竹も踏こかへす、
たよりまを、又あつと打ひひき、
古めくく見えまもあ、
心といはく、禮の者は、
たつた

かけ、
の数は、
出ると、
しと思ふ、
等の身よ、
楽の位も、

顔とて見まはれ大つくりものうき也
よは者不きむに眼とす都都
にまゝ大身小身にうきと富者
貧乏其身分おるに生ふ茶
道の本意とす利休か所謂他
いざはし他はとるはあしとも

云いこころ高者なる者おるか
あつたふさぬ

利休茶百首の最終の歌に云く
規矩作法守りおしと破るも
雖も、とるも本と忘るも

利休の一枚起請に云く

店主我朝に、清の哲者達の
沙汰一申さるゝ親会の茶湯
にちあつても、又世の台と今の心
さすといふも、茶湯にもあつて、
只の品の濁ささやうん清には湯

だに沸ぬれば、必ずやあそと思ひ
ひとそのまゝのに、別な仔細は候
はず、但一ぬるやとらふ事は、此駒
さくまう籠に候へば、ようらつて其中
はこもり候也、はあに身こもる

すまぬがば、二人の憐にはぐん
数寄の者といはれまじ、此道も
信せん人は、たとふ利陣の眞さを得
たるといふも、一文あいの愚鈍の
身ともうそ、片入るたの無切の

輩に同くくして、数寄の振舞
をせし、只く一向に湯をあかす
し、釜の湯とほたい湯をあかし
茶をたすのまはかりある本を
あつし

一以意上人の養の十徳に云く

諸佛加護 五臟調和

孝養父母 穀粒消除

壽命長延 睡眠自除

息災延命 天神降心

諸天加護 臨終不乱

一彦根辰井伊大老は養事

の心得をまをて曰く為るる養

令むも一生一代の養令と云ふ

よ同し養令は存い何し得る

いと云ふれ又養事しりりあ

と送り出せしも思く行ふしん

其の物語を廻ひやるる筆に
に後しては母を養ふ具を片
つげず自ら養ふと云ふ餘ろ
に前刻の如く記す事
も想ひ暫時あを思ひ
後茶事と云ふ事

一 酒客と茶客 酒茶の優劣
を争ひ論法原書古端に
を吐く一因人も有る多論を
判し詩を吟しと云

松上雲雨花上雨

お對 剛豪 奈者 吾言
天下 尚尤 相酒 亦酒
哉 奈者 本奈

酒 奈者 仁方 乃 乃 乃
此 酒 之 用 以 酒 後 之 奈 最

女 味 之 奈 者





